類型学研究 (2005), *83–104*

アルメニア語・ゴート語における疑問文の統辞法

千種眞一

疑問文は一般に(1)諾否疑問文，(2)否定辞を伴う疑問文，(3)疑問詞を伴う疑問文の3つに分けられる。諾否疑問文と否定辞を伴う疑問文とは一般に対極疑問文(polar question)と呼ばれているものの下位群である。否定辞疑問も肯定か否定の答を予期ないし含意しているからである。以下では，ギリシア語新約聖書の翻訳文語としてのアルメニア語とゴート語において疑問文が統辞法的にどのような振る舞いをしているのかを考察していく(1)。

1．諾否疑問文

1．1．無標の疑問文

これは否定または肯定の返答が予期されていることを文法的に示す標識を伴わない無標の疑問文である。ギリシア語ではテクストの編者によって文末に置かれる標識(;)が疑問文であることを形式的に示す唯一のしるしであり，これがなければ，疑問であるかどうかは文脈によって決定しなければならない。ラテン語における小辞 -ne が現れるタイプに相当する。

アルメニア語では疑問文は分節的には無標であり，一般的には上昇調のイントネーションも文末に置かれるのではなく，文中の位置を問わず、疑問の対象・焦点となる語に置かれた。テクスト上では paroyk 'circumflex' と称される音調を高める標識がその疑問の対象となる語の強勢音節の母音の上に置かれた。しかし，以下の諸例が示すように，諾否疑問文では paroyk は原則として文頭の語に置かれた（この標識は既に最古の写本に見られるが，本稿では当該語の直後に疑問符(?)を付して代用する)。

ゴート語では疑問文は分節的には無標である疑問文と，前倚辞–u により示される疑問文とがあった。諾否疑問文に用いられたのはもっぱら前者の無標タイプであった。テクストではギリシア語と同様に文末に疑問符が付される。したがって，このタイプの疑問文でアルメニア語の paroyk はギリシア語，ゴート語には見られない疑問の対象とされる語の焦点化という特徴を示している：

Lk 4,34 ἦλθες ἀπολέσαι ἡμᾶς;「お前は俺たちを滅ぼしに来たのか」

Arm: ekir korowsanel? zmez

Goth: qamt fraqistjan unsis?

Jn 16,31 ἄρτι πιστεύετε;「あなた方は今信じているのか」

Arm: ayžm? hawatayk‘

Goth: nu galaubeiþ?

1Cor 1,13 μεμέρισται ὁ Χριστός;「キリストは分けられてしまっているのか」

Arm: bažaneal? inč‘ ic‘ē K‘S

Goth: disdailiþs ist Xristus?

Lk 7,44 βλέπεις ταύτην τὴν γυναῖκα;「あなたにはこの女性が見えるか」

Arm: tesanes? z-ays kin

Goth: gasaihvis þo qinon?

Mt 27,11 σὺ εἶ ὁ βασιλεὺς τῶν Ἰουδαίων;「お前はユダヤ人たちの王なのか」

Arm: dow? es t‘agaworn hrēic‘

Goth: þu is þiudans Iudaie?

Ga 3,3 οὕτως ἀνόητοί ἐστε, ἐναρξάμενοι πνεύματι νῦν σαρκὶ ἐπιτελεῖσθε;「かくもあなた方は無分別なのか，霊によって始めておきながら，今や肉によって完成しようとするのか」

Arm: aynč‘ap‘ anmit? ēk‘, skseal hogwov ew ard marmnov vaxčanik‘

Goth: swa unfroþans sijuþ? anastodjandans ahmin nu leika ustiuhiþ?

Ro 7,13 τὸ οὖν ἀγαθὸν ἐμοὶ ἐγένετο θάνατος; μὴ γένοιτο「では善いものが私にとって死となったのだろうか。断じてそんなことはあってはならない」

Arm: isk ard inj barin mah ełew. k‘aw lic‘i

Goth: þata nu þiuþeigo warþ mis dauþus? nis-sijai!

アルメニア語ゾフラブ(Zohrab)写本 Ro 7,13 では paroyk が現れていないが，これが疑問表現であることは後続の語句から明らかである。このようにアルメニア語の写本では，これといった明確な理由もなく単に paroyk が欠如している例は珍しくない。しかし，ギリシア語原典における疑問文は文脈に基づいた決定を経て，編者によって文末の疑問標識で示されるので，編者や解釈者によっては疑問文であるか否かに関して一致を見ない場合も起こりうる：

Ro 2,21-22 ὁ οὖν διδάσκων ἕτερον σεαυτὸν οὐ διδάσκεις; ὁ κηρύσσων μὴ κλέπτειν κλέπτεις; (22) ὁ λέγων μὴ μοιχεύειν μοιχεύεις; ὁ βδελυσσόμενος τὰ εἴδωλα ἱεροσυλεῖς;「他の者を教えているあなたが〔なぜ〕自分自身を教えようとはしないのか。盗まないようにと言い広めているあなたが〔なぜ〕盗むのか。姦淫しないよ

うにと言っているあなたが〔なぜ〕姦淫するのか。もろもろの偶像を嫌悪しているあなたが〔なぜ〕神殿を略奪するのか」

上記の箇所について最近のテクストはほとんどが疑問文と解している。これらは疑問の形をとってはいるが，内容的には断定文として機能している。この疑問文は「その通り，あなたは現に自分自身を教えてはいない」という肯定の答えを予期した反語的な疑問なのである。これにより諾否的な3つの疑問文が後続している。この箇所のアルメニア語訳は以下のようになっている：

isk ard or owsowc'anes zənkern, zanjn k'o oč' owsowc'anes. or k'orozes č'gołanal gołanas. (22) or ases č'šnal šnas. or daršis i meheneac' zsełans kołoptes

ギリシア語の疑問文がすべて平叙文で訳されているのである。4つもの疑問文が並列されている原文を故意に無視したとは到底考えられない。とすれば，推定される原因としては，アルメニア語訳が拠ったテクストは現在採用されているテクストとは異なるタイプのものであったか，あるいは現在採用されているテクストは用いたが，アルメニア語翻訳者がこれらの疑問文の意味を断言的に解釈したうえで平叙文にしたか，のどちらかであろう。即断はできないが，ギリシア語で疑問文に用いられる直説法は断言的な答えを期待することが多いことを考慮すれば，翻訳者による解釈という可能性が幾分高いように思われる。上に掲げた疑問文はすべて直説法を用いているが，1Cor 1,13 で原文の現在完了形に対してアルメニア語訳が接続法をあてて，しかもinč'「何か」という明確には言い表せない不定的な要素を加えているのは，おそらく「キリストが分けられてしまっている」という事態について話者がいだいている疑念あるいは不確実さが表現されたものであろう。

1．2．有標の疑問文—ゴート語前倚辞–u による疑問文—

上記のような無標疑問文のほかに，ゴート語には前倚的な疑問小辞–u による疑問文が頻出する。これは前倚辞という接語としての性格によって文頭の語の直後に添加される。表面上は同じに見えるアルメニア語の paroyk の位置とは関係がない。付加すべき語が複合語である場合は，複合第1要素の直後に付接され，前置詞句である場合は，前置詞に付接された。前倚辞–u 自体が疑問化の機能を担っているから，慣例のようにテクスト表記上は文末に(?)を付加する必要はなかった。アルメニア語では paroyk は原則として文頭の語に置かれたが，ギリシア語原文で述語動詞が文頭に現れることが多かったために、結果的には述語動詞に優先的に置かれることになった（下記 Jn 18,22.39 参照）：

Mk 10,38 δύνασθε πιεῖν τὸ ποτήριον ὃ ἐγὼ πίνω;「あなた方は私の飲む杯を飲むことができるのか」

Arm: karēk‘? əmpel zbažakn zor es əmpeloc‘ em

Goth: maguts-u driggkan stikl þanei ik driggka

Jn 13,12 γινώσκετε τί πεποίηκα ὑμῖν;「私があなた方に何をしたかあなた方は知っているか」

Arm: gitēk‘? zinč‘ ararid jez

Goth: witud-u hva gatawida izwis?

Jn 18,39 βούλεσθε οὖν ἀπολύσω ὑμῖν τὸν βασιλέα τῶν Ἰουδαίων;「お前たちはあのユダヤ人たちの王を自分たちのために釈放してほしいか」

Arm: ard kamik‘? zi arjakec‘ic‘ jez zt‘agaworn hrēic‘

Goth: wileid-u nu ei fraletau izwis þana þiudan Iudaie?

Lk 9,54 κύριε, θέλεις εἴπωμεν πῦρ καταβῆναι ἀπὸ τοῦ οὐρανοῦ καὶ ἀναλῶσαι αὐτούς;「主よ，天から火が下り，彼らを焼き払うように私たちが命ずることを望むか」

Arm: TR, kamis? zi asasc‘owk‘ ew iǰc‘ē howr yerknic‘ ew satakesc‘ē znosa

Goth: frauja, wileiz-u ei qiþaima, fon atgaggai us himina jah fraqimai im

Jn 18,22 οὕτως ἀποκρίνῃ τῷ ἀρχιερεῖ;「お前は大祭司様に向かってそのような答え方をするのか」

Arm: aydpēs patasxani? tas k‘ahanayapetid

Goth: swa-u andhafjis þamma reikistin gudjin?

Mt 9,28 πιστεύετε ὅτι δύναμαι τοῦτο ποιῆσαι;「あなた方は私がこのことをなせると信じるのか」

Arm: hawatayk‘? et‘e karoł em arnel jez zayd

Goth: ga-u-laubjats þatei magjau þata taujan?

Jn 9,35 σὺ πιστεύεις εἰς τὸν υἱὸν τοῦ ἀνθρώπου;「あなたは人の子を信じるか」

Arm: dow hawatas? yordi AY

Goth: þu ga-u-laubeis du sunau gudis?

上記 Mt 27,11 とこの Jn 9,35 には同じ 2 人称代名詞が現れているが，アルメニア語 dow?から明らかなように，Mt 27,1 では代名詞に焦点が当てられているのに対して，後者では動詞述語ないしは文全体が疑問化されているために，アルメニア語・ゴート語両語において動詞に標識が付加されている。2 人称代名詞に焦点が当てられて，実際に–u が付接された例は以下に見られる：Lk 7,19 σὺ εἶ ὁ ἐρχόμενος ἢ ἄλλον προσδοκῶμεν;「あなたが『来るべき者』であるか、それともわれわれは別の者を待つ

べきであるか」= dow? es or galoč'n es et'e aylowm akn kalc'owk' = þû is sa qimanda þau anþaranu wenjaima?　ゴート語の þû は代名詞 þu と小辞–u が融合したものと言われている。このように疑問の意図は共通であっても，Mt 27,11 のように無標にも，Lk 7,19 のように有標にもすることができた。

以下の箇所では，アルメニア語写本は疑問の標識を付していない：

Lk 18,8 ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου ἐλθὼν ἆρα εὑρήσει τὴν πίστιν ἐπὶ τῆς γῆς;「人の子が到来するとき，いったい彼は地上に信仰を見出すだろうか」

Arm: ordi mardoy ekeal, gtanic'ē ardewk' hawats yerkri

Goth: sunus mans qimands bi-u-gitai galaubein ana airþai?

Jn 18,34 ἀπὸ σεαυτοῦ σὺ τοῦτο λέγεις ἢ ἄλλοι εἶπόν σοι περὶ ἐμοῦ;「それはあなた自身から言っているのか，それとも他の人たちが私についてあなたに言ったのか」

Arm: i k'ēn ases zayd, et'e aylk' asac'in k'ez zinēn

Goth: ab-u þus silbin þu þata qiþis þau anþarai þus qeþun bi mik?

1．3．ゴート語小辞 an による疑問文

以下に見るように，ゴート語では小辞 an により導入される疑問文が5例見られる。Streitberg(1981: 63)によれば，これ自体は疑問小辞ではないが，大半が疑問代名詞と結合して現れており，固有の疑問語を伴わずに an によって疑問文がつくられている箇所(Jn 18,37)もあることから、疑問小辞に近い機能をもつものであろうとされている。Brugmann(1925: 225)はラテン語 an と併記して疑問小辞と見ている(2)：

Lk 10,29 καὶ τίς ἐστίν μου πλησίον;「それでは私の隣人とは誰か」

Arm: ew o? ē im ənker

Goth: an hvas ist mis nehvundja?

Lk 18,26 καὶ τίς δύναται σωθῆναι;「では誰が救われるのか」

Arm: ew o karic'ē aprel

Goth: an hvas mag ganisan?

Jn 9,36 καὶ τίς ἐστιν, κύριε, ἵνα πιστεύσω εἰς αὐτόν;「では誰だろう，主よ，私がその方を信じることができるように」

Arm: TR, ov? ē zi hawatac'ic' i na

Goth: an hvas ist, frauja, ei galaubjau du imma?

Lk 3,10 τί οὖν ποιήσωμεν;「それでは私たちは何をしたらよいのか」

Arm: ard zinč'? gorcesc'owk'

Goth: an hva taujaima?

次の箇所は an が疑問代名詞とともに用いられていない点で重要な証拠と考えられる：

Jn 18,37 οὐκοῦν βασιλεὺς εἶ σύ;「それでは（やはり）お前は王なのだな」
　Arm: apa t'e aydpēs ic'ē t'agawor omn es dow
　Goth: an nuh þiudans is þu?

Lehmann(1974: 179)はこの箇所を引用しながら，an を［–Dec（平叙）］の標識として言及し，一種の疑問小辞と見ている。ギリシア語で疑問接続詞として用いられている οὐκοῦν が唯一現れていることでも重要である。ここはローマ総督ピラトゥスとイエスとのやりとりの場面であるが，引用文は，ピラトゥスがイエスに対して dow? es t'agaworn hreic'「お前がユダヤ人どもの王なのか」という問いかけに，イエスが im ark'ayowt'iwn č'ē yaysm ašxarhē「私の王国はこの世からのものではない」，また bayc' ard t'agaworowt'iwn im č'ē asti「しかし実際には，私の王国はこの世からのものではない」と発言したのを受けて，再びピラトゥスが起こした疑問文である。ゴート語訳とは対照的に，アルメニア語訳は原文とかなり異なっているが，原文に記された両者のやり取りを明瞭に伝えようとする意図がうかがわれ，ゴート語 an の機能を考える上でも注目に値する。「王国」にあたる原語は βασιλεία であるが，アルメニア語では ark'ayowt'iwn「神の王国」と t'agaworowt'iwn「世俗的な王国」を区別している。この最後の t'agaworowt'iwn という言い方をあげつらって，apa「だから」でイエスの言い分を引き取り，t'e aydpēs ic'ē「もしお前の言うようなことであるならば」と条件を加えた上で，t'agawor omn es dow「お前はともかくも王なのだな」と，最初の質問で t'agawor に付されていた定冠詞を取り去って，新たに不定的な omn をわざわざ添加することによって，イエスをユダヤ人の王ではなくとも「なんらかの（世俗的な）王」であることを疑問文という形で確認しているというものである。これに対して，イエスが dow ases t'agawor ic'em「あなたの方が，私を王だと言っている（に過ぎない）」とやり返している。

以上はアルメニア語における οὐκοῦν の解釈的な翻訳である。ゴート語ではこれに an nuh をあてているように見えるが，実質的な意味をもたない οὐκ- を除いた οὖν に対応するのが an nuh であるとすれば，解釈上 nuh はアルメニア語 apa に，an は t'e aydpēs ic'ē にそれぞれ対応していると理解される。アルメニア語翻訳においてなされたこうした読みがゴート語訳者の意識にもあったとするならば，前節に挙げた純粋に疑問を標示する小辞–u とは異なり，an は相手の発言を受けて，発話者が「それでは訊くが」と疑問を起こして，相手の真意を引き出す談話的標識であったと考え

られる。

2．否定辞を伴う疑問文

ギリシア語では否定および肯定の返答を期待ないし予期する疑問文は否定辞を用いて示された。否定辞は疑問文のはじめか主動詞の近くに置かれることが多い。

2．1．単純な否定疑問文

これは否定または肯定の返答が予期されていることを文法的に示す標識を伴わない無標の否定疑問文であり，ゴート語では ni＋直説法あるいは nei＋希求法で標示される：

Lk 17,18 οὐχ εὑρέθησαν ὑποστρέψαντες δοῦναι δόξαν τῷ θεῷ εἰ μὴ ὁ ἀλλογενὴς οὗτος;「神に賛美を捧げるために戻って来たと見てとれるのは，この他部族の者しかいないのか」

Arm: zi oč‘ gtan dařnal tal p‘ařs AY, bayc‘ miayn aylazgis ays

Goth: ni bigitanai waurþun gawandjandans giban wulþu guda, niba sa aljakunja?

アルメニア語は疑問文としてではなく，先行する「ほかの 9 人はどこにいるのか」という疑問が発せられたことに対する理由を述べた文と解釈して，zi を文頭に置いて訳している。

Mk 12,10 οὐδὲ τὴν γραφὴν ταύτην ἀνέγνωτε;「お前たちはこの聖句を読んだことがないのか」

Arm: ew oč‘ zgirn zayn ic‘ē ənt‘erc‘eal jer

Goth: nih þata gamelido ussuggwuþ?

2Cor 3,8 πῶς οὐχὶ μᾶλλον ἡ διακονία τοῦ πνεύματος ἔσται ἐν δόξῃ;「どうして霊の奉仕がよりいっそう栄光のうちにあるものとならないことがあろうか」

Arm: orč‘ap‘ ews ařawel paštōn hogwoyn ełic‘i p‘ařōk‘

Goth: hvaiwa nei mais andbahti ahmins wairþai in wulþau?

最後の例は本来の疑問文というよりもむしろいわゆる修辞疑問文であって，その主眼は確言ないし主張にあると考えられる。アルメニア語では否定辞を伴わずに疑問詞 orč‘ap‘「どれほど…か」のみを用いて，修辞的な文意を肯定的に解している。

2．2．否定の返答を予期する疑問文

否定の返答を予期する疑問文は通常 μή/μήτι によって導入される(cf. Lat. num)。アルメニア語では mit'e あるいは mi et'e によって導入される。ゴート語は ibai を用いる。ギリシア語 μή，アルメニア語 mi，ゴート語 ibai がすべていわゆる「禁止の小辞」としても機能していることから，これらの小辞により導入された文内容が拒否されるべきものとして把握されていることは明らかである：

Mt 9,15 μὴ δύνανται οἱ υἱοὶ τοῦ νυμφῶνος πενθεῖν ἐφ' ὅσον μετ' αὐτῶν ἐστιν ὁ νυμφίος;「新婚の部屋の子らは，花婿が一緒にいる間は悲しむことができるだろうか」

Arm: mi et'e mart' inč'? ic'ē mankanc' aṙagasti swog aṙnowl minč' p'esayn ənd nosa ic'ē

Goth: ibai magun sunjus bruþfadis qainon und þata hveilos þei miþ im ist bruþfaþs?

Mt 7,16 μήτι συλλέγουσιν ἀπὸ ἀκανθῶν σταφυλὰς ἢ ἀπὸ τριβόλων σῦκα;「人は茨からぶどうの房を，あざみからいちじくを集めるだろうか」

Arm: mit'e k'ałic'en? i p'šoy xałoł kam i tataskē t'owz

Goth: ibai lisanda af þaurnum weinabasja aiþþau af wigadeinom smakkans?

Jn 9,27 μὴ καὶ ὑμεῖς θέλετε αὐτοῦ μαθηταὶ γενέσθαι;「まさかあなた方も彼の弟子になろうというわけではないだろうに」

Arm: mi t'e ew dowk' kamik' ašakertel? nma

Goth: ibai jah jus wileiþ þamma siponjos wairþan?

Jn 9,40 μὴ καὶ ἡμεῖς τυφλοί ἐσμεν;「まさかこのわれわれも盲目〔だと言うの〕ではないだろうね」

Arm: mi t'e ew mek' koyrk'? ic'emk'

Goth: ibai jah weis blindai sijum?

Lk 6,39 μήτι δύναται τυφλὸς τυφλὸν ὁδηγεῖν; οὐχὶ ἀμφότεροι εἰς βόθυνον ἐμπεσοῦνται;「盲人が盲人を道案内できるだろうか。それでは両者とも溝に落ちてしまわないだろうか」

Arm: mit'e karic'ē? koyr kowri aṙaǰnordel, oč' apak'en erkok'in i xorxorat ankanic'in

Goth: ibai mag blinds blindana tiuhan?　niu bai in dal gadriusand?

Ro 11,1 μὴ ἀπώσατο ὁ θεὸς τὸν λαὸν αὐτοῦ; μὴ γένοιτο ... (2) οὐκ ἀπώσατο ὁ θεὸς τὸν λαὸν αὐτοῦ ὃν προέγνω「神は自らの民を拒んだのだろうか。断じてそんなことがあってはならない。(2)神は，あらかじめ知っていた自らの民を拒みはしなかった」

Arm: mi t'ē meržeac'? AC zžołovowrd iwr. k'aw lic'i ... (2) oč'meržeac' AC zžołovowrd iwr zor yařajn caneaw

最後の例はギリシア語とアルメニア語で共に，否定の返答を予期する疑問文の直後に否定の希求法と否定のアオリスト直説法を続けて，その文意を明確に示している点で典型的な箇所であるといえる。

ゴート語 nibai「まさか…ではあるまいね」は希求法と共に用いて，否定の返答を強調的に示唆する修辞的な色合いの疑問に用いられるが，ギリシア語とアルメニア語には特にこのようなニュアンスを示す表現は見られない：

Jn 7,35 μὴ εἰς τὴν διασπορὰν τῶν ἑλλήνων μέλλει πορεύεσθαι καὶ διδάσκειν τοὺς Ἕλληνας;「まさか彼はギリシア人のディアスポラへ行って，ギリシア人を教えようとしているのではあるまいね」

Arm: mi t'e i sp'iřs? het'anosac' ert'ayc'ē ew owsowsanic'ē zhet'anoss

Goth: nibai in distahein þiudo skuli gaggan jah laisjan þiudos?

Jn 8,22 μήτι ἀποκτενεῖ ἑαυτόν, ὅτι λέγει· ὅπου ἐγὼ ὑπάγω ὑμεῖς οὐ δύνασθε ἐλθεῖν;「彼は『私が往こうとしているところに，あなた方は来ることができない』などと言っているが，だからといって，まさか自害するつもりではあるまい」

Arm: mi t'e ziwrovin? ert'ayc'ē, zi asē t'e owr esn ert'am dowk' oč' karēk' gal

Goth: nibai usqimai sis silbin, ei qiþiþ: þadei ik gagga, jus ni maguþ qiman?

同様に，ゴート語では肯定の小辞 ja と -u の結合形 jau が否定の返答を期待する疑問に用いられるが，ギリシア語とアルメニア語にそのような語形は見られない：

Jn 7,48 μὴ τις ἐκ τῶν ἀρχόντων ἐπίστευσεν εἰς αὐτὸν ἢ ἐκ τῶν Φαρισαίων;「指導者たちの中で，あるいはファリサイ派の人々の中で，彼を信じた人などまさかいるまい」

Arm: mi t'e ok' yišxanac'n hawatac'? i na kam i p'arisec'woc'

Goth: jau ainshun þize reike galaubidedi imma aiþþau Fareisaie?

2．3．肯定の返答を予期する疑問文

肯定の返答を予期する疑問文はギリシア語 οὐ/ουχί によって導入される(cf. Lat. nonne)。アルメニア語では oč'/č'- によって，ゴート語では niu によってそれぞれ標示される。アルメニア語では否定辞にさらに apak'ēn を添えてこの文意を明示することがある：

Mt 6,25 ουχὶ ἡ ψυχὴ πλεῖόν ἐστιν τῆς τροφῆς καὶ τὸ σῶμα τοῦ ἐνδύματος;「命は食物以上のものであり，体は着物以上のものではないか」

Arm: oč' apak'ēn ogi aṙawel ē k'an zkerakowr ew marmin k'an zhanderj

Goth: niu saiwala mais ist fodeinai jah leik wastjom?

Mk 14,60 οὐκ ἀποκρίνῃ οὐδέν;「お前は何も答えないのか」

Arm: oč'? inč tas patasxani

Goth: niu andhafjis waiht?

Lk 4,22 ουχὶ υἱός ἐστιν 'Ιωσὴφ οὗτος;「この者はヨセフの息子ではないか」

Arm: oč' sa ē ordin Yovsēp'ay?

Goth: niu sa ist sunus Iosefis?

1Cor 9,1 οὐκ εἰμὶ ἐλεύθερος; οὐκ εἰμὶ ἀπόστολος; οὐχὶ 'Ιησοῦν τὸν κύριον ἡμῶν ἑόρακα;「私は自由ではないのか。私は使徒ではないのか。私は私たちの主イエスを見たのではないのか」

Arm: oč' apak'ēn azat em, oč' apak'ēn aṙak'eal em, oč' apak'ēn zTR mer YS K'S ač'ōk' imovk' tesi

Goth: niu im apaustaulus? niu im freis? niu Iesu Xristau fraujan unsarana sahv?

2．4．多重否定疑問文

ギリシア語の疑問文において2つの否定辞が連続して現れることがある。問題はそれらが一緒に働いているのか，あるいは別個に働いているのかということ，またそれらが否定しているのが語なのか，あるいは文全体なのかということである。ギリシア語では原則として μὴ οὐ は複合的否定辞であり、否定の返答を予期する疑問文に用いられるが，統辞法上は否定辞 οὐ と動詞が単位をなしている。他方，οὐ μή は強調を目的とした単一の否定辞とみなされる。前者は否定の返答を予期する疑問であるから，以下の例が示すように，アルメニア語は mit'ē oč' を，ゴート語は ibai ni を用いて訳している：

Ro 10,18-19 μὴ οὐκ ἤκουσαν; μενοῦνγε, ... μὴ 'Ισραὴλ οὐκ ἔγνω;「彼らは聞かなかったのであろうか。否，むしろ...(19)イスラエルは知らなかったのであろうか。〔そんなことはない〕

Arm: mit'ē oč'? lowan, manawand ... mit'ē Israyēl oč'? lowau

Goth: ibai ni hausidedun? raihtis ... ibai Israel ni fanþ?

1Cor 9, 4-5 μὴ οὐκ ἔχομεν ἐξουσίαν φαγεῖν καὶ πεῖν; (5) μὴ οὐκ ἔχομεν ἐξουσίαν

ἀδελφὴν γυναῖκα περιάγειν;「私たちは食べたり飲んだりする権限をもたないのであろうか。私たちは一人の姉妹を妻として連れて回る権限をもたないのであろうか」

Arm: mit'ē oč' ownic'imk' išxanowt'iwn owtel ew əmpel, mit'ē oč'? ownic'imk' išxanowt'iwn zk'ors kanays šrǰec'owc'anel ənd mez

Goth: ibai ni habam waldufni matjan jah drigkan? ibai ni habam waldufni swistar qinon bitiuhan?

1Cor 11,22 μὴ γὰρ οἰκίας οὐκ ἔχετε εἰς τὸ ἐσθίειν καὶ πίνειν;「そもそもあなた方は食べたり飲んだりするための家をもたないのか」

Arm: mit'ē towns? oč' ownic'ik' owteloy ew əmpeloy

Goth: ibai auk gardins ni habaiþ du matjan jah drigkan?

次の例では οὐ μή が現れており，肯定的な返答を予期する疑問である。したがって，アルメニア語では oč'が，ゴート語では niu がそれぞれ用いられている：

Jn 18,11 τὸ ποτήριον ὃ δέδωκέν μοι ὁ πατὴρ οὐ μὴ πίω αὐτό;「父が私に与えてくださったこの杯を飲まずにいられようか」

Arm: zbažakn zor et inj hayr, oč'? əmpic'em zna

Goth: stikl þanei gaf mis atta, niu drigkau þana?

3．疑問詞を伴う疑問文

ギリシア語と同様にアルメニア語・ゴート語においても，疑問代名詞や疑問副詞によって疑問文が作られる。疑問詞は本来，必ずしも文頭には立つことのなかった不定代名詞であったとされるが，それ自体強勢をもたなかったため次第に文頭に置かれるようになったと考えられる(3)：

Mt 3,7 τίς ὑπέδειξεν ὑμῖν φυγεῖν ἀπὸ τῆς μελλούσης ὀργῆς;「やがて来るべき怒りから逃れるようにと，誰がお前たちに入れ知恵したのか」

Arm: o? c'oyc' jez p'axč'el i barkowt'enēn or galoc'n ē

1Cor 4,7 τίς γάρ σε διακρίνει; τί δὲ ἔχεις ὃ οὐκ ἔλαβες; εἰ δὲ καὶ ἔλαβες, τί καυχᾶσαι ὡς μὴ λαβών;「いったい誰があなたを判断しているのか。自分が受けなかったものを，あなたは何か持っているのか。もしもやはり受けたのなら，なぜあなたは，受けていないかのように誇るのか」

Arm: isk ard ov? ē or k'nnic'ē zk'ez. zinč'? ownis zor oč' ic'ē aṙeal. ew et'ē aṙer, zi? parcis ibrew zč'aṙeal

Goth: hvas auk þuk ussokeiþ? hvauþ-þan habais þatei ni namt? aiþþau jabai andnamt, hva hvopis swe ni nemeis?

Mk 5,9 τί ὄνομά σοι;「お前の名は何というのか」

Arm: zinč'? anown ē k'o

Goth: hva namo þein?

Mk 3,33 τίς ἐστιν ἡ μήτηρ μου καὶ οἱ ἀδελφοί [μου];「私の母，私の兄弟たちとは誰か」

Arm: o? ē im mayr kam ełbark'

Goth: hvo ist so aiþei meina aiþþau þai broþrjus meinai?

Mk 12,16 τίνος ἡ εἰκὼν αὕτη καὶ ἡ ἐπιγραφή;「これは誰の像か，また誰の銘か」

Arm: oyr? ē patkers ays kam gir

Goth: hvis ist sa manleika jah so ufarmeleins?

Lk 6,47 πᾶς ὁ ἐρχόμενος πρός με καὶ ἀκούων μου τῶν λόγων καὶ ποιῶν αὐτούς, ὑποδείξω ὑμῖν τίνι ἐστὶν ὅμοιος「私のもとに来て，私の言葉を聞き，それらを行うすべての者は，誰と同じであるか，あなたたちに示そう」

Arm: amenayn or gay ar̄ is ew lsē zbans im ew ar̄nē znosa, c'owc'ic' jez owm nman ē

Goth; hvazuh sa gaggands du mis jah hausjands waurda meina jah taujands þo, ataugja izwis hvamma galeiks ist

Mt 8,27 ποταπός ἐστιν οὗτος;「この人はどういう人だろう」

Arm: orpisi? ok' ic'ē sa

Goth: hvileiks ist sa?

Mk 11,28 ἐν ποίᾳ ἐξουσίᾳ ταῦτα ποιεῖς;「お前は何の権威をもってこのようなことをするのか」

Arm: orov? išxanowt'eamb ar̄nes zayd

Goth: in hvamma waldufnje þata taujis?(4)

Mk 6,38 πόσους ἄρτους ἔχετε;「あなたたちはどれほどのパンを持っているのか」

Arm: k'ani nkanak ownik'

Mk 9,11 ὅτι λέγουσιν οἱ γραμματεῖς ὅτι Ἠλίαν δεῖ ἐλθεῖν πρῶτον;「なぜ律法学者たちは『エリヤがまず最初に来なくてはならない』と言うのか」

Arm: zinč'? ē ayn zor dpirk'n asen et'e nax Ēłiayi part ē gal

Goth: unte qiþand þai bokarjos þatei Helias skuli qiman faurþis?

最後の箇所はギリシア語 ὅτι が疑問詞として用いられた稀有な例であるが，アルメニア語ではこの用法を疑問詞 zi などを用いて直訳するのは決して不可能ではなかった

はずであるにもかかわらず，ayn zor のように指示詞と関係代名詞の結合によって zinč'?の内容を文法的に名詞化することで，原文の珍しい用法を生かそうとしたのではないかと考えられる。ὅτι は τί ὅ τι の省略形であるように見えるが(cf. Blass–Debrunner–Rehkopf §300,4)，Mk 2,16 ὅτι に対してはアルメニア語 zi? ē zi ...= ゴート語 hva ist þatei ...= τί ὅτι のように，アルメニア語もゴート語も共に異読 τί ὅτι を採用していることから見ても，この箇所 Mk 9,11 のアルメニア語訳は異例であるといってよい(cf. Lk 5,30 διὰ τί = əndēr?)。

次は，新約聖書において πότερον ... ἢ によって示される二重疑問文の唯一の箇所である：

Jn 7,17 γνώσεται περὶ τῆς διδαχῆς πότερον ἐκ τοῦ θεοῦ ἢ ἐγὼ ἀπ' ἐμαυτοῦ λαλῶ
「この教えについて，それが神からか，それとも私が私自身から語っているのか，人は知るであろう」

Arm: gitasc'ē vasn vardapetowt'eans yAY ic'ē ardewk', et'es (M: et'e es) inč' yanjnē immē xawsim

Goth: ufkunnaiþ bi þo laisein fram-uh guda sijai, þau ik-u fram mis silbin rodja

πότερον はもはや疑問詞としての資格を失い，ἢと相関的に用いて選択疑問文を特徴づける小辞のような語になっている。ここで現れているアルメニア語 ardewk' は特に疑問語というわけではなく疑問語を強める語として ἄρα(Mk 4,41 þannu; Lk 8,25 訳されず)，ἄν(Lk 9,46 þau)，ἀληθῶς(Jn 7,26 bi sunjai)などに対する一方で，この箇所のようにギリシア語において疑問小辞とされている ἆρα(Lk 18,8)や πότερον ... ἢ(Jn 7,17)にも対応している点で興味深い。ゴート語では小辞–u が用いられて疑問であることを明示しているが，アルメニア語にはこのような特別の手だてはないので，ardewk' だけが疑問であることを示す代用語となっている(千種 1997: 4)。

次は福音書において ἆρα が現れている唯一の箇所である：

Lk 18,8 πλὴν ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου ἐλθὼν ἆρα εὑρήσει τὴν πίστιν ἐπὶ τῆς γῆς「しかし，人の子が到来する時，いったい彼は地上に信仰を見出すだろうか」

Arm: isk ordi mardoy ekeal gtanic'ē ardewk' hawats yerkri

Goth: iþ sweþauh sunus mans qimands bi-u-gitai galaubein ana airþai

ここでも同様に，ゴート語では前倚辞–u によって疑問であることを示したが，アルメニア語はやはり ardewk' によってこれを示すしか手だてはなかった。ゴート語訳は欠損しているが，ἆρα が出て来る箇所はアルメニア語で ardewk' が用いられている(5)：

Ac 8,30 ἆρά γε γινώσκεις ἃ ἀναγινώσκεις;「あなたは読んでいることが分かるか」
Arm: gitic'es? ardewk' zor ənt'er̄nowc'owsd

4．二重疑問文（選択疑問文）

このタイプの疑問文には，アルメニア語とゴート語は似たような振る舞いをするように見えるが，実際には微妙に異なっている。すなわち，アルメニア語では原則として最初の選択項には小辞を伴わず，通常は 2 番目の選択項が et'e(t'e)「それとも」によって導かれるのに対して(6)，ゴート語では最初の項には小辞を伴わないことも前倚辞–u を伴うこともあり，第 2 項には þau(稀に aiþþau)が立つが，この場合でも特に小辞–u (–uh)が þau に後続する最初の語に付接されるなどして，アルメニア語に比べ著しい多様性を示している。以下 Mt 9,5 から 1Cor 11,22 は最初の項に小辞を伴わずに第 2 項の前に þau が置かれているだけの例(X þau Y)である：

Mt 9,5 τί γάρ ἐστιν εὐκοπώτερον, εἰπεῖν, ἀφίενταί σου αἱ ἁμαρτίαι, ἢ εἰπεῖν, ἔγειρε καὶ περιπάτει;「なぜなら，『あなたの罪は赦される』と言うのと，『起きよ，そして歩き回れ』と言うのと，どちらがたやすいか」
Arm: zinč'? diwrinē, asel t'ołeal lic'in k'ez mełk' k'o, et'e asel ari ew šrǰeac'
Goth: hvaþar ist raihtis azetizo qiþan: afletanda þus frawaurhteis, þau qiþan: urreis jah gagg?

Mt 27,17 τίνα θέλετε ἀπολύσω ὑμῖν, Βαραββᾶν ἢ Ἰησοῦν;「お前たちは誰を自分たちに釈放して欲しいか。バラバか，それともイエスか」
Arm: zo? kamik' yerkowc' asti zi arjakec'ic' jez, zYēsow Barabbay? et'e zYS
Goth: hvana wileiþ ei fraletau izwis? Barabban þau Iesu

1Cor 11,22 μὴ γὰρ οἰκίας οὐκ ἔχετε εἰς τὸ ἐσθίειν καὶ πίνειν; ἢ τῆς ἐκκλησίας τοῦ θεοῦ καταφρονεῖτε, καὶ καταισχύνετε τοὺς μὴ ἔχοντας;「そもそもあなた方は食べたり飲んだりするための家を持たないのか。それともあなた方は神の教会を軽侮し，そして持たざる者たちを侮辱するのか」
Arm: mit'ē towns? oč' ownic'ik' owteloy ew əmpeloy, et'ē zekełec'eawn AY arhamarhēk', ew yamōt' ar̄nēk' zč'k'aworsn
Goth: ibai auk gardins ni habaiþ du matjan jah drigkan? þau aikklesjon gudis frakunnuþ, jah gaaiwiskoþ þans unhabandans?

以下の Jn 9,2 から Mk 3,4 では最初の項に–u が付接されている(X–u þau Y)：

Jn 9,2 τίς ἥμαρτεν, οὗτος ἢ οἱ γονεῖς αὐτοῦ, ἵνα τυφλὸς γέννηθῇ;「盲目で生まれたからには，誰が罪を犯したのか。この人か，それともその両親か」
Arm: oyr? vnas ē. sora, t'e hawr ew mawr iwroy zi koyr cnc'i
Goth: hvas frawaurhta, sa-u þau fadrein is, ei blinds gabaurans warþ?
Jn 18,34 ἀπὸ σεαυτοῦ σὺ τοῦτο λέγεις ἢ ἄλλοι εἶπόν σοι περὶ ἐμοῦ;「それはあなた自身から言っているのか，それとも他の人たちが私についてあなたに言ったのか」
Arm: i k'ēn ases zayd, et'e aylk' asac'in k'ez zinēn
Goth: ab-u þus silbin þu þata qiþis þau anþarai þus qeþun bi mik?

次のアルメニア語では原文にない zinč'?を補い，前文に半ば独立性をもたせたことによって(対応箇所 Lk 6,9 も同様)，後半部の前項に疑問符が付される形になっている(cf. 上記 Mt 27,17)：

Mk 3,4 ἔξεστιν τοῖς σάββασιν ἀγαθὸν ποιῆσαι ἢ κακοποιῆσαι;「安息日に許されているのは，善をなすことか，それとも悪をなすことか」
Arm: zinč'? aržan ē i šabat'ow, bari? inč' gorcel et'e čar ařnel
Goth: skuld-u ist in sabbatim þiuþ taujan aiþþau unþiuþ taujan?

以下の Mk 12,14 から Mt 11,3 は第 1 項と第 2 項に–u(h)が付接されている例(X–u[h] þau B–u[h])である：

Mk 12,14 ἔξεστιν δοῦναι κῆνσον Καίσαρι ἢ οὔ; δῶμεν ἢ μὴ δῶμεν;「カエサルに税金を払うことは許されているのか，いないのか。私たちは払うべきか，払うべきではないのか」
Arm: aržan? ē hark tal kayser, et'e oč'. tac'owk'? t'e oč tac'owk'
Goth: skuld-u ist kaisaragild giban kaisara, þau ni-u gibaima?

この例ではアルメニア語はギリシア語原文を忠実に訳しているが、ゴート語では原文のそれぞれ独立した第 1 文と第 2 文の後半部とが混交しているように見える。この現象に関して Streitberg(1919: 211)は，ラテン語訳 an non dabimus を参照しながらも，ラテン語テクストの影響というよりは単なる省略であって，筆写生が最初の δῶμεν から 2 番目の δῶμεν へと跳び越えてしまったらしいと推測している。ただし，対応箇所 Lk 20,22 では ἔξεστιν ἡμᾶς Καίσαρι φόρον δοῦναι ἢ οὔ; = skuldu ist unsis kaisara gild giban þau niu? のように忠実な訳がなされており，筆者生がたまたまこの箇所を参照しなかったと仮定する限りにおいて，Streitberg の推測は受け入れることができ

る。この箇所を顧慮したとすれば，このような省略は起こり得なかったであろうからである。しかし，たとえ対応箇所を参照したとしても，Mk 12,14 の忠実な訳であったろうと考えられる kaisara に続く þau niu? gibaima þau niu gibaima?では、叙法的には第 1 文の不定詞 giban(＋skuld)と第 2 文の希求法形 gibaima が平行しているために，その間に挟まれたもう 1 つの gibaima が余剰的な語とみなされて，むしろ意図的に跳び越えてしまったのかもしれない。

Ga 3,5 ὁ οὖν ἐπιχορηγῶν ὑμῖν τὸ πνεῦμα καὶ ἐνεργῶν δυνάμεις ἐν ὑμῖν, ἐξ ἔργων νόμων ἢ ἐξ ἀκοῆς πίστεως;「あなた方に霊を与え，力を働かせる方は，律法の業によってなのか，それとも信仰に聞き従ったことによってなのか」

Arm: isk ard or bašxeac‘ i jez zhogin, ew aǰołeac‘ i jez zzōrowt‘iwns, i gorcoc‘? ōrinac‘ ē et‘ē i lroy hawatoc‘

Goth: saei nu andstaldiþ izwis ahmin jah waurkeiþ mahtins in izwis, uz-u waurstwam witodis þau uz-u gahauseinai galaubeinais?

Mk 11,30 τὸ βάπτισμα τὸ Ἰωάννου ἐξ οὐρανοῦ ἦν ἢ ἐξ ἀνθρώπων;「ヨハネの洗礼は天からのものであったか，それとも人間からのものであったか」

Arm: mkrtowt‘iwnn Yovhannow yerknic‘? ēr, et‘e i mardkanē

Goth: daupeins Iohannis uz-uh himina was þau uz-uh mannam?

Mt 11,3 σὺ εἶ ὁ ἐρχόμενος ἢ ἕτερον προσδοκῶμεν;「あなたが来たるべき方か，それとも私たちはほかの者を待つべきか」

Arm: dow? es or galoc‘n es, et‘e ayłowm akn kalc‘owk‘

Goth: þû is sa qimanda þau anþariz-uh beidaima? (Lk 7,19 þau anþaran-u wenjaima)

二重疑問文に関してはゴート語のような統辞法上の変異は見られないものの，アルメニア語においては，文中にまったく疑問符を伴わない Jn 18,34 および疑問詞に続く選択項に疑問符を伴わない Mt 9,5(zinč‘ ... X et‘e Y)と Jn 9,2(oyr? ... X t‘e Y)を除いて，疑問符が第 1 の選択項にのみ添加されるという特徴が指摘されよう(X? et‘e Y)。選択疑問で焦点とされる選択項は原則として第 1 項の方であり，こうした現象は疑問の対象となる語が文頭もしくはそれに近い位置において焦点化するという事実と無縁ではない。

5．従属（間接）疑問文

上記では直接的に問われる諾否疑問文，否定辞を伴う疑問文，疑問詞を伴う疑問文を見てきたが，無論これらは間接的にも問うことができる。間接疑問文は統辞的には

従属節という形をとることが多いので、従属疑問文と言われることもあるが，特にアルメニア語については単純に間接疑問文と言っていいのか，あるいは従属疑問文と言うべきなのかという問題が問われる。

アルメニア語における従属（間接）疑問文の標識は t'e (稀に et'e)であり，疑問詞の有無には左右されない。t'e は汎用性の高い従属化標識であることは，Künzle(1984) が t'e に関して次のような用法を掲げていることからも理解される：1) Zur Ankündigung eines Satzes: Direkte Rede (oft: ὅτι); Zur Einleitung eine (AT-)Zitates; Zur Einleitung von Fragen (mit und ohne Fragepron., -adverb), Direkt Fragen, Abhängige Fragen (meist: εἰ 'ob'), Doppelfragen (Zur Einführung des 2. Gliedes; erstes Glied meist ohne Einführungspartikel. Griech.: ἤ 'oder'); Zur Einleitung abhängiger Aussage- und Begehrungssätzen, deutsch "dass"; Final. 2) Zur Einleitung von Konditional-, Konzessiv-, Konsekutiv- und Kausalsätzen. さらに，これらに属さない用法もいくつか指摘されている。してみると，従属疑問における t'e はそのきわめて広範な用法の 1 つに過ぎないことがわかる。そして，時制・叙法に関してアルメニア語では，従属疑問に含まれる動詞は基本的に接続法現在である（主文動詞との関係により直説法現在・過去や接続法アオリストも可能）という事実が重要である。Jensen(1959: 204)に従えば，間接疑問であるか否かを決定する基準は人称の転換，および過去の場合にのみ時制の転換であるが，実際には時制形の選択は主文の時制によって規定されてはおらず，むしろ従属化接続詞 t'e によって規定されていると考えられる。以下に示されるように，写本では疑問符が疑問詞以外の成分にも付されて，あたかも直接疑問文であるかのように見えるのも，アルメニア語における t'e のこうした機能と従属化の基本的な叙法としての接続法現在の機能とによるものである。それゆえに，アルメニア語では直接疑問文と対比される間接疑問文という区別よりも，直接疑問文と機能的に接触した従属的な疑問文といった方が当を得ている。例えば，Mk 8,23 harc'anēr c'na t'e tesanic'ē? (3.sg.subj.pres.) inč' = ἐπηρώτα αὐτόν, εἴ τι βλέπεις;「彼は彼に，何か見えるか，とたずねた」では，ギリシア語直接疑問文 2 人称に対して 3 人称への転換が行われながらも，疑問符が付されているために，完全な間接疑問文とは言い切れず，逆に Jn 9,15 harc'anein zna ew p'arisec'ik'n t'e ziard? tesanes (2.sg.ind.pres.) = ἠρώτων αὐτὸν καὶ οἱ Φαρισαῖοι πῶς ἀνέβλεψεν「ファリサイ派の人々もまた，どのようにして視力が回復したのかのかをたずね始めた」では，ギリシア語間接疑問文 3 人称に対して 2 人称への転換が図られ，動詞も原文の過去形から現在形へと転換されているにもかかわらず，従属化標識 t'e が現れている(7)。こうしたことから，前者を間接疑問文，後者を直接疑問文というように区別しても意味がないことがわかる。疑問符と t'e を用いた表記に関する限り，アルメニア語としては両者共に従属的な疑問文であると判断する以外にはない。

ゴート語では，疑問詞を伴う間接疑問文と疑問詞を伴わない間接疑問文とでは統辞法が異なり，原則として前者には特別な手段は用いられず，後者には前倚辞–u が付接された。叙法に関しては，従属疑問文の叙法は独立疑問文のそれと本質的には異ならない。ただし，主節の動詞が過去時制であるならば，従属の希求法疑問文でも時制の転移が行われて，希求法過去形が現れなければならないという規則が重要である (Streitberg 1981: 88)。以下，ギリシア語原文において Lk 5,19 は疑問詞疑問文，Lk 1,62 は τὸ により導かれた疑問詞疑問文，Mk 3,2 は疑問詞を伴わない疑問文であり，主文動詞が過去である従属節の動詞に対してアルメニア語ではすべて接続法現在，ゴート語ではすべて希求法過去が現れている：

Lk 5,19 μὴ εὑρόντες <u>ποίας</u> εἰσενέγκωσιν αὐτὸν διὰ τὸν ὄχλον「彼らは，群衆のために，どこを通って彼を運び込んだらいいのか分からなかった」
Arm: ibrew oč‘ gtanein <u>t‘e ənd or</u> mowc‘anic‘en zna i nerk‘s vasn amboxin
Goth: ni bigitandans <u>hvaiwa</u> innatbereina ina in manageins

Lk 1,62 ἐνένευον δὲ τῷ πατρὶ αὐτοῦ <u>τὸ τί</u> ἂν θέλοι καλεῖσθαι αὐτό「彼らは彼の父親に合図を送り，彼がその子にどんな名を付けたがっているのか〔うかがった〕」
Arm: akn arkanein hawrn nora <u>t‘e zinč‘?</u> kamic‘i koč‘el zna
Goth: gabandwidedun þan attin is, <u>þata hvaiwa</u> wildedi haitan ina [8]

Mk 3,2 παρετήρουν αὐτὸν <u>εἰ</u> τοῖς σάββασιν θεραπεύσει αὐτόν「人々は，彼が安息日に彼を癒すかどうかうかがっていた」
Arm: spasein nma <u>et‘e</u> bžškic‘ē zna i šabat‘own（対応箇所 Lk 6,7: t‘e）
Goth: witaidedun imma hailidedi·<u>u</u> sabbato daga

Mk 8,23 ἐπηρώτα αὐτόν, <u>εἴ τι</u> βλέπεις;「彼は彼に，何か見えるか，とたずねた」
Arm: harc‘anēr c‘na <u>t‘e</u> tesanic‘ē? inč‘
Goth: frah ina ga·<u>u·hva</u>·sehvi

最後の例では，直接疑問詞疑問文とこれに前置された間接疑問文を導く εἰ とに対して，ゴート語ではそれぞれ忠実に hva と–u を用い，しかも規則に従って動詞が希求法過去形に転移されて，ゴート語に固有の統辞法的振る舞いを見ることができる。一方，アルメニア語は εἰ に対して従属化標識 t‘e を用いるが，「見える」かどうかが焦点とされているために，原文の不定代名詞をその動詞の後ろに置き変えているという点でアルメニア語的な訳と言うことができる[9]。

ゴート語で ibai（＋直説法），アルメニア語で mit‘e（＋接続法）によって標示される否定の返答を予期あるいは含意する独立疑問文の動詞は，従属疑問では原則としてゴート語で ibai＋希求法に転換されるが，アルメニア語では mit‘e を goy「ある」の

硬化した副詞的表現 gowc'ē「ひょっとして,…しないように,そうでなければ」(Meillet 1962: 105)に代え，文意に応じて叙法が選択されている：

2Cor 12,20 φοβοῦμαι γὰρ μή πως ἐλθὼν οὐχ οἵους θέλω εὕρω ὑμᾶς「私が行った時，ことによると私が欲しないようなあなた方を見出すのではないか，と恐れている」
Arm: erknč'im, gowc'ē ekeal oč' orpisis kamic'imn gtanic'em zjez
Goth: og ibai aufto qimands ni swaleikans swe wiljau bigitau izwis
Ga 4,11 φοβοῦμαι ὑμᾶς μή πως εἰκῇ κεκοπίακα εἰς ὑμᾶς「私は，あなた方に対して無駄な労力を費してしまったのではないかと，あなた方のことが心配だ」
Arm: erknč'im i jēnj, gowc'ē t'ē i zowr inč' vastakec'i i jez
Goth: og izwis ibai sware arbaididedjau in izwis

ギリシア語原文のそれぞれ接続法アオリストと直説法完了に対して，ゴート語はそれぞれ希求法の現在と過去で対応しているが，アルメニア語は前者に接続法現在，後者に直説法過去というように，原文の叙法を生かしている。このような措置は，接続法を要求する gowc'ē が，福音書では原文に倣って 1 箇所のみ直説法と用いられている例にも見られる：Jn 7,26 gowc'ē ardewk' ew išxank'n gitac'in t'e *sa* ic'ē K'Sn = μήποτε ἀληθῶς ἔγνωσαν ... = ibai aufto bi sunjai ufkunþedun ...「ひょっとして指導者たちはこの者がキリストだと本当に知ったのだろうか」(cf. Jensen 1959 §525)。

6．むすび

本稿では，ギリシア語新約聖書の翻訳文語としてのアルメニア語とゴート語が疑問文の統辞法においてどのような振る舞いをしているのかを，諾否疑問文，否定辞を伴う疑問文，疑問詞を伴う疑問文を中心にしながら，さらに二重疑問文と従属疑問文を加えて考察した。

諾否疑問文ではアルメニア語にはゴート語の–u のような明確な疑問化標識は見られず，写本においては疑問標識 paroyk も現れないこともあるが，ゴート語には見られない特徴として，原則として文頭語の上に置かれる疑問標識は焦点化との関連で捉えるべきことを明らかにした。否定辞を伴う疑問文では，特にゴート語の nibai が否定の返答を強調的に示唆する修辞的な色彩の濃い疑問文に用いられ，ギリシア語・アルメニア語にはこうしたニュアンスを示す表現が見られないことを示した。また，アルメニア語の ardewk' が疑問標識であるかのように振る舞う機能に注目した。

二重疑問文ではゴート語が選択項の提示の仕方に著しい多様性を見せているのに対して，アルメニア語ではそのような統辞法的変異は見られないものの，疑問符が第 1 の選択項にのみ添加されるという特徴は，アルメニア語において疑問の対象となる語

が文頭もしくはこれに近い位置で焦点化するという事実と関連していることを指摘した。最後に，アルメニア語のいわゆる間接疑問文はゴート語に見られるような直接疑問文と対比される間接疑問文ではなく，直接疑問文と機能的に接触した従属疑問文であることを明らかにして，ゴート語とは統辞類型的に異なっていることを論じた。

注

(1) 疑問文一般については，千種(2001: 214-217)を参照されたい。

(2) Ernout–Thomas(1972: 158f.)は疑念(doute)を標示する小辞とみている(cf. Ter., Eu. 382 flagitium facimus. — an id flagitiumst, si ...? "c'est une infamie que nous faisons. — est-ce une infamie que de ...?")。

(3) アルメニア語では他の文成分が強調のために文頭に置かれる場合，疑問詞が必ずしも文頭に立つ必要はなかった：Mt 13,54 sma owsti? ic'ē ays imastowt'iwn ew zawrowt'iwnk' = πόθεν τούτῳ ἡ σοφία αὕτη καὶ αἱ δυνάμεις;「この知恵と力ある業とはどこからこの者にやって来たのか」。ゴート語でも，語順は原文を踏襲しているものの，文頭に立たないことも可能であったことを示す例が見られる：Lk 17,17 οἱ δὲ ἐννέα ποῦ;「ほかの 9 人はどこか」= isk ard inownk'n owr? en = iþ þai niun hvar?

(4) ゴート語では hvas が形容詞的に用いられるとき，その名詞は部分属格に置かれるが，アルメニア語では疑問代名詞は形容詞的にも用いることができるので，修飾疑問詞と被修飾名詞は同格に置かれる：Lk 9,55 οὐκ οἴδατε οἵου(ποίου) πνεύματός ἐστε ὑμεῖς = oč' gitēk' oro(y) hogwoy ēk' dowk' = niu wituþ hvis ahmanē sijuþ. Mt 5,46 τίνα μισθὸν ἔχετε; = zinč'? varjk' ic'en = hvo mizdono habaiþ? (Mk 11,28 ἐν ποίᾳ ἐξουσίᾳ ταῦτα ποιεῖς; = orov? išxanowt'eamb aṙnes zayd = in hvamma waldufnje þata taujis?) 1Th 3,9 τίνα γὰρ εὐχαριστίαν δυνάμεθα τῷ θεῷ ἀνταποδοῦναι = zinč'? karemk' gohowt'iwn matowc'anel AY = hva auk awiliude magum usgildan guda.

(5) Gal 2,17 ἆρα Χριστὸς ἁμαρτίας διάκονος; μὴ γένοιτο「キリストは罪への奉仕者か。断じてそんなことはない」に対してアルメニア語 apaowremn K'S mełac'? paštōneay ełew, k'aw lic'i, ゴート語 þannu Xristus frawaurhtais andbahts? nis-sijai のように，共に ἆρα の正確な訳ではない。apaowremn「それで，それゆえに」は誤訳か。この箇所で Streitberg は，þannu が常に ἄρα に対応しており，ἆρα に誤って訳したと注記している(cf. Blass–Debrunner–Rehkopf §440,4)。ギリシア語の疑問小辞ἆρα (ἆρά γε)は稀であってルカとパウロ書簡に限られる。

(6) mit'e, mi et'e ... kam = μήτι ... ἤ のように二重疑問文の第 2 項のように見える項

が kam によって標示される例が福音書で Mt 7,16 mit'e k'ałic'en? i p'šoy xałoł kam i tataskē t'owz および Mk 4,21 mi et'e gay črag zi ənd growanaw dnic'i kam ənd mahčawk' (oč' apak'ēn i veray aštanaki dnic'i)に見られる。Jensen (1959 §511)によれば, kam は t'e により標示される第 2 の選択肢を導入するのではなく，意味的に第 1 の疑問に平行する文成分を導入している。Mt 7,16 では「茨から葡萄の房を集める」ことと「あざみからいちじくを集める」ことが選択肢として並立されているのではなく，平行的な行為として並べられているに過ぎない。Mk 4,21 では「ともし火が置かれるのは『桝の下や寝台の下』ではなく」，選択されるべきは後続する「燭台の上」である。つまり，mit'e は二重疑問文として kam と相関しているのではなく，mit'e 以下の部分を全体的に捉えて，それに対して否定的含意を伴う疑問文に仕立てているのである。

(7) 直接疑問文にも t'e を前置する現象は，ギリシア語で間接疑問文を導入する εἰ が直接疑問文にも前置される現象を想起させる：Mt 12,10 ἐπηρώτησαν αὐτὸν λέγοντες, εἰ ἔξεστιν τοῖς σάββασιν θεραπεῦσαι; = harc'in c'na ew asen, et'e part? ic'ē i šabat'ow bžškel「人々は彼にたずねて言った，『安息日に癒すのは許されているのか』」。Mt 19,3 λέγοντες, εἰ ἔξεστιν ἀνθρώπῳ ἀπολῦσαι τὴν γυναῖκα αὐτοῦ; (直接疑問) = asein, et'e aržan? ic'ē owmek' arjakel zkin iwr および Mk 10,2 ἐπηρώτων αὐτὸν εἰ ἔξεστιν ἀνδρὶ γυναῖκα ἀπολῦσαι (間接疑問) = harc'anein zna ew asein, et'e aržan? ic'ē ařn zkin iwr arjakel では，ギリシア語・アルメニア語共に直接・間接の区別は実質的にないといってよい。

(8) 間接疑問文を名詞化する τό には Lk 1,62 の他に 9,46 でも þata があてられているが，Lk 19,48 οὐχ εὕρισκον <u>τὸ τί</u> ποιήσωσιν「彼らは，何をしたらよいか，見出せなかった」= Arm: oč' gtanein <u>t'e zinč'</u> arasc'en = Goth: ni bigetun <u>hva</u> gatawidedeina では，ゴート語訳は þata を伴わない読みに従っているかも知れない（さらに 1Th 4,1 も同様)。ちなみに，アルメニア語ではパウロ書簡に限られるこの τό は Lk 22,4(zi)を除き, Lk 1,62 9,46 19,48 22,2.23.24 Ac 4,21 22,30 1Th 4,1 すべてで t'e またはその変異形を用いて訳されている。

(9) アルメニア語で εἰ に対して従属化標識 t'e が対応箇所間で見られない場合がある：Mt 27,49 tesc'owk' et'e (εἰ) gay Ēłia p'rkel zda と Mk 15,36 tesc'owk' gay Ēłia iǰowc'anel zda.

参考文献

Blass, Friedrich und Albert Debrunner. (1990) *Grammatik des neutestamentlichen Griechisch*. Bearbeitet von Friedrich Rehkopf. 17.Auflage. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Brugmann, Karl. (1925) *Die Syntax des einfachen Satzes im Indogermanischen.* Berlin und Leipzig: Walter de Gruyter & Co.

千種眞一. (1997)「古アルメニア語統辞法の若干の問題について」『東北大学言語学論集』6, 1-26.

千種眞一. (2001)『古典アルメニア語文法』. 東京：大学書林.

Ernout Alfred et François Thomas. (1972) *Syntaxe Latine.* 2e Édition. Paris: Édition Klincksieck.

Jensen, Hans. (1959) *Altarmenische Grammatik.* Heidelberg: Carl Winter.

Künzle, Beda. (1984) *Das altarmenische Evangelium/L'Evangile arménien ancien.* Teil I/Ière partie: *Edition,* Teil II/IIe partie: *Lexikon/Lexique* (Europäische Hochschulschriften, Reihe XXI. *Linguistik und Indogermanistik,* Band 33). Bern: Peter Lang.

Lehmann, Winfred P. (1974) *Proto-Indo-European Syntax.* Austin: University of Texas Press.

Meillet, Antoine. (1962) *Études de Linguistique et de Philologie Arméniennes,* I. Lisboa: Imprensa Nacional.

Streitberg, Wilhelm. (1919) *Die gotische Bibel.*[2] sechste, unveränderte Auflage. 1971. Heidelberg: Carl Winter.

Streitberg, Wilhelm. (1981) *Gotische Syntax,* herausgegeben von Hugo Stopp. Heidelberg: Carl Winter.